

期待の若手シリーフ

私にも
言わせて!
第90回

葛飾区での感染症対策について



葛飾区健康部(保健所)
保健予防課
松本 昌子
平成12年新潟大学医学部医学科卒業。検疫所勤務を経て29年4月東京都に入職し、大田区保健所に勤務。31年4月より現職。

東京都に入職して3年目です。今回、こちらに寄稿させていただく機会をいただき、誠にありがたく存じます。現在、葛飾区保健所で公衆衛生医師として感染症業務を中心に従事しておりますので、葛飾区保健所の現状について紹介させていただきます。将来の展望について述べさせていただきます。

葛飾区について

葛飾区といえば東京の下町、寅さんやキャプテン翼などのキャラクターのイメージが強いと思いますが、23区ある特別区の一つで、人口約46万人(23区中9番目)、面積34.80km²(23区中7番目)かつ工業集積地域(工場数は23区中4番目)でもあります。葛飾区の出生率は、人口千対7.7(出生率が低い区23区中3番目)、高齢化率は24.5%(23区中3番目)と少子高齢化が顕著です。

分ほどの住宅地にある平成23年に建設されたモダンな建物で、子ども総合センターを併設しています。こちらでさまざまな職種の皆さまにお世話になりながら、楽しく働かせていただいています。

結核について

感染症業務の中心は結核で、葛飾区の結核罹患率は人口10万対17.2(23区中9番目)と全国(12.3)、東京都(14.3)と比べ、高くなっています(図1)。

近年、葛飾区では外国人数が2万698人と増加傾向で、中でも中国、韓国、フィリピン、ベトナム

ムなど結核高蔓延国からの入国者も多く、外国国籍罹患率は、人口10万対69.9と高くなっています(図2)。葛飾区では、結核高蔓延国からの入国者で、小学校・中学校の転入の際、健診でIGRA検査を行っており、また、日本語学校生徒の胸部X線撮影を行う健診事業等でハイリスク者に対応しています。しかし、今後、さらに外国人が増加することが予想され、入国前健診などの抜本的な結核対策が早急に求められます。

また、葛飾区では前述のとおり、工場が多く、結核患者の職場の接触者健診として、町工場に調査に出掛けることがあります。狭い空間で多人数が作業している例もあり、健診対象者が多数になるという特徴があります。また、こうした工場で働く外国人の方も増えています。

新型コロナウイルス患者移送訓練

うと患者が所属する会社(事業所)や工場をイメージされてきましたが、最近では、派遣労働で同一期間に多種多様な職場で働く若者の結核患者もいて、接触者健診の範囲も区をまたいで多業種となった例が見られます。接客業に限らず、保育や教育なども派遣労働者頼みとなっている今日の「働き方」に接触者健診も従来どおりにはいかない難しさを感じます。

新型コロナウイルス対応訓練は、地域の医療機関と協力し合う貴重な機会ですので本稿で触れさせていただきます。令和元年6月1日、区内で新型コロナウイルス患者が発生することを想定した実践的な訓練を行いました。実際に訓練を実施してみると、さまざまな疑問や意見、想定外の出来事

図1 結核罹患率年次推移

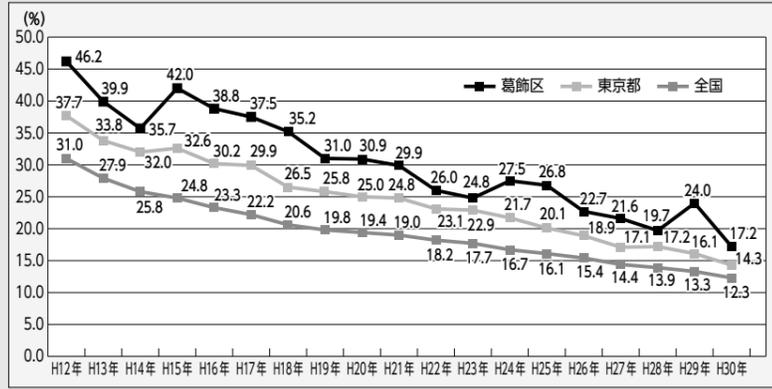
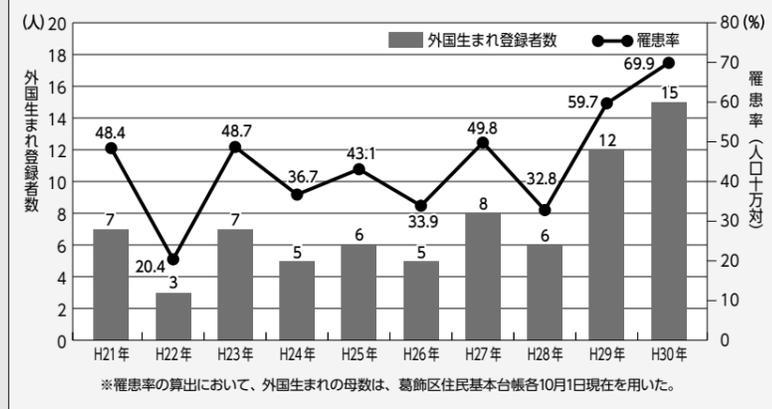


図2 葛飾区在中外国人の結核罹患率年次推移



があることを実感しました。訓練では、病院前にテントを張って疑い患者の受け入れを行いました。患者のトイレや食事はどうするのかといった問題点、また、医師が汚染域にいるため、記載した発生届の用紙や携帯電話を汚染されたものとしてチャック付ポリ袋に入れ、汚染域と清潔域の区別に想像以上に苦心しました。6月の比較

的蒸し暑い日に訓練を行いました。ゴーグルが曇って視野が狭くなり、防護服を着ての患者対応がかなり難しいことを実感しました。今後、こうした訓練を継続することの大切さを改めて確認しました。

将来の展望について

ワクチンや抗生剤によって人類は感染症を克服してきたと考えられ

■新型コロナウイルス患者移送訓練の様子



電話で罹患状況を確認

問診の様子



ストレッチャーで搬送中

ホワイトボードに罹患の経緯をまとめる

ていましたが、近年、新興・再興感染症、AMR等その想定に反する事象が起こっています。エボラ出血熱やMERSなど治療法が確立してない感染症には、医学が進歩した今日でも隔離という昔からの手法しかないことに改めて驚かされます。常識ではなかなか捉えられないところが、感染症の興味深さではないでしょうか。今後も保健所業務を通じて、感染症の知識・経

験を深めていきたいと思っています。保健所業務は社会変化に伴い、対応が変化しています。そのため、公衆衛生の分野には、若い医師の柔軟な思考や独創性が必要と考えます。少子高齢化で行き詰まった日本の将来を変えられるのはやはり当事者である若い人たちではないでしょうか。たくさんの医学生・研修医の先生方に公衆衛生の分野に興味を持っていただきたいと思っています。